おてら　第１１１号　令和６年 報恩講号　発行　浄土真宗本願寺派 蒲原 浄光寺（TEL 025-229-0629）

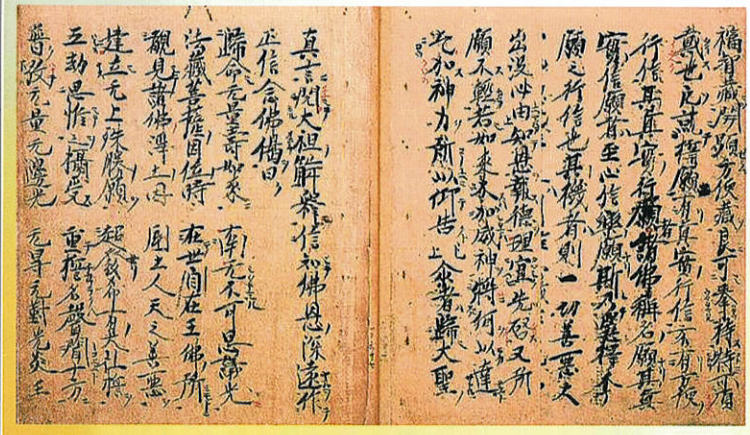
おてら

報恩講

十一月十六日（土）

午前十一時より

浄土真宗のご開祖親鸞聖人（一一七三～一二六三）の御祥月御命日にご聖人のご苦労を偲び感謝し、そのみ教えを味あわせていただき、明日の私の生きる糧とさせていただく法要です。



『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）
親鸞聖人自筆の坂東本（国宝・真宗大谷派所蔵）の中にある「正信偈」冒頭部分

常例十六日講
毎月十六日午後一時より
お経練習・法話会

写経会
毎月第二・四金曜日
午後一時より

あるがままにいただく

住職　蒲原　霊英

今年の検診で新生児の頭大の子宮筋腫が見つかり、竹山病院へ行った時、「前に来た時は赤ちゃんを産みに産科に来たのに、今度はもう用無しになった子宮の病気で婦人科か」と、時の流れと自分の老いを突き付けられ、幾ばくかの寂寥感を感じました。半年間の経過観察を経て、筋腫を小さくする為に女性ホルモンの分泌を抑えて生理を止める薬を今飲んでいます。要するに、騙し騙し閉経させる薬です。これで完全に、「女性としての役割は終わり」と宣告された感じで、何となくショックを受けている自分が居ます。元々私は、自分の老いる過程をしっかりと見届けようと思って、白髪も染めないでいますし、もちろんシワやシミ取りやヒアルロン酸注射なんてするつもりは毛頭ありません。そのように、外見の老いに対しては抗うことなく受け容れていたのですが、体の内側に関する老いについては、なかなか受け容れられない自分が居たのです。同じ自分の身に起こっていることなのに勝手なものです。

さて、親鸞聖人が最終的に到達した境地が「自然法爾」であり、「自然」は「おのづからしからしむ」と読み、人間のはからいを超えた如来のはからいによる救いを表し、「法爾」も同義語とされました。分かりやすく言い換えれば「あるがまま」です。阿弥陀様のおはからいをあるがままにいただいて、あるがままにおまかせさせていただくのです。

所詮私たちは、自分の一番大事ないのちの始まりと終わりさえ、自分のはからいで決めることなど出来ません。ではその間の人生はどうかというと、これも一見自分で決めて歩んで来たように思えても、その実ほとんどは自分の思い通りには運んでいません。もちろん老いてゆくことも病気になることも、生きている以上、そもそもこの身に起こることすべて、自分のはからいではどうにでもなるものではないのです。であれば、すべて阿弥陀様からの賜り物と思ってありがたく頂戴し、そのおはからいにおまかせさせていただくのはどうでしょうか。さすれば、何か起こる度に、悩み苦しんだり苛立ったり嫉妬したり恨んでみたりせずに、心穏やかに暮らさせていただけるのではないでしょうか。そして、いずれそこには感謝の念が芽生えて来るでしょう。

かく言う私も冒頭の件で、我が身の勝手さを省みつつ、改めてあるがままにいただくことの「言うは易し行うは難し」を痛感している次第です。　合掌

彼岸中日法要
永代経法要

九月二十二日午前十一時より秋彼岸中日法要が、翌二十三日午後七時よりこの一年間に永代経をご進納くださった方々をご招待し、浄光寺総永代経法要がお勤めされました。献灯・献花・献供物の後に読経が始まり、参拝者の方々が順次ご焼香。御文章拝読の後、住職よりご法話があり、本山御用達のお供物（亀屋陸奥「松風」）と記念品が下付されました。

永代経は、その時できる人ができる事をさせていただくことで、皆で永代にわたり仏を供養し、み教えが伝わってゆくようにするという、相互扶助の精神をもって受け継がれて来ました。皆様からのご浄財は主に災害支援に活用させていただき、能登半島地震に対する支援も継続的に行っております。

メールアドレスを教えてください

10月1日より郵便料金が値上げされたのを機に、「おてら」をPDFファイルで受け取っても構わないという方には、メールアドレスを教えていただきたく存じます。
空メールでよろしいので、下記浄光寺のメールアドレス宛かHPのお問い合わせフォームからメールを送っていただきますよう、よろしくお願い致します。

joukouzi@mug.biglobe.ne.jp

『教行信証』が生まれるまで 1

今年は浄土真宗の立教開宗八〇〇年にあたる年ですが、浄土真宗を開かれたという基準となるのが、親鸞聖人が自ら著された『顕浄土真実教行証文類』（以下、略称『教行信証』）です。

『教行信証』は、聖人が生涯をかけて説き広められた、阿弥陀如来の本願を信じてお念仏を称えれば誰でも救われるという教えを体系的にまとめられたものです。『教行信証』の「教文類」の最初のところで、「謹んで浄土真宗を案ずるに」（この書物を書くにあたって浄土真宗という教えを考えてみると）と書き始められており、聖人にとって『教行信証』のご執筆が、浄土真宗の教えを体系的にしっかりまとめようという目的だったことが分かります。

現在、聖人のご自筆の『教行信証』として残っているのは、「坂東本」（真宗大谷派所蔵）と呼ばれるものだけです。しかし、ここにはいつこれを書かれたのかという年代が記されていません。ただ、「化身土文類」の中に、「わが元仁元年」（今私がいる元仁元年）と一ヶ所だけリアルタイムの年代を書かれている箇所があることから、元仁元年には最終巻にあたる「化身土文類」までまとめられていたことが分かります。つまり、この時点で浄土真宗の体系的な構想が出来上がっていたことになります。このことから、浄土真宗の立教開宗が元仁元年（一二二四）とされているのです。また、聖人の筆跡の特徴を分析すると、完全なものにすべく最晩年まで加筆修正しておられたことが分かっています。（本願寺新報より一部修正転載）

月忌納め法要
（おみがき）
十二月十六日
午後一時より
仏様ご先祖様に一年の感謝を申し上げましょう

除夜会法要
十二月三十一日
午後十一時半より
除夜の鐘をついてみませんか
豚汁の振る舞いがあります